
クリスマスの奇跡

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの奇跡

【Nコード】

N7092P

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

クリスマスに起きるいろんな世界のキャラクターの不思議な夜。

約束（前書き）

内容グタグタ

約束

白い雪がサウザンドサニー号の芝生に乗っかる。
外に出れば白い息が上空へと消えて行く。

「寒いねえ。」

独り言のように一人たたずむ銀髪的青年。
小さな肩を抱き締めて空にちりばめられた無限の星を数える。

「外にいと風邪をひくぜ。」

肩に乗せられた温かい毛布。

青年は後ろを振り向かず ゆっくりと瞼を閉じた。

「ありがとう。サンジ。」

「お安いご用ですよ。レディ。」

サンジの言葉はふざけていて青年はそれに気づいて小さく笑う。

「ホットココアでも飲むか？」

「うん。」

青年はクルッと方向回転するとサンジの前を歩いてキッチンへと入って行った。

キッチンの中はストーブの熱によって心地よい温かさに保たれていた。

毛布を外さずに机にひれ伏すように倒れる。

「おいおい。寝るなよ。」

「寝ないよぉー。」

おっとりとした口調で青年は答えるとサンジの後ろ姿に目を向けた。男なのにほっそりとした体に白くて細い腕。

あの手を器用に使って料理をしていると考えると・・・おそろしい。

「サンジ。」

「ん？」

「今日は何の日か知ってる？」

「・・・さあ。」

ホットココアを運びながらサンジは首をかしげた。

青年は体勢を立て直しながらカップの取っ手を握る。

湯気の立つココアの中ではミルクがクルクルと渦を描いていた。

「クリスマス・イヴ。」

「ああ・・・。そういえば。」

「サンジは何が欲しい？」

質問にサンジは少しだけ首をひねる。

青年はココアに口をつけて熱いと思ったのか一旦机に戻した。

「あ、冷蔵庫が欲しい。ロック付きの。」

「ああ。ルフィとか勝手に食べちゃうもんね。」

「そうそう。こないだなんか肉がーか月分なかったしよ。」

サンジが話し始めると色々な話題が出てきて二人は数分の間話を続けた。

青年はココアをちよくちよく飲みながらサンジの話を聞いていた。

たまに「そうだね。」「俺は。」と話したりもしていた。

「で、マリモはいつも俺に突っかかってくるからよ!」

最後のほうがゾロに対する愚痴ばかり。

でも、青年はその話を時に笑ったり、苦笑したりして聞いていた。話しの話題も尽きてくるころにサンジは青年に尋ねた。

「お前は何が欲しいんだ?」

「・・・記憶。」

その言葉にサンジはココアを飲む手を止めた。

青年の記憶は曖昧で小さい頃の記憶など一切なかった。

だから、その言葉を発せられると何と返事を出せばいいかサンジは困る。

「・・・記憶を取り戻したらどうするんだ?」

「帰るよ。東の海（イーストブルー）にね。」

青年がココアを飲みながら言った。

サンジは何かの衝動に駆られて勢いよく立ちあがった。

青年はびっくりした様子でサンジを見上げたまま微動だにしない。心拍数が上がっていくのがわかりサンジは息をのんだ。

沈黙。鼓動が大きく聞こえる。

「サンジ?」

「・・・行くなよ。」

「え?」

口をついて出たのはそんな言葉だった。

「絶対に行くな！昔より今だろ？仲間を置いてどっか行くなんて・
・やめろよ！一緒にまだまだ冒険するんじゃないのかよ！俺は絶対に嫌だ。絶対だ！！」

こんなこと言うつもりは毛頭なかった。

けど、勢いに乗って思いついたことはすべて吐き出していた。

「・・・サンジ。」

「絶対にいくなつてば・・・。」

気がつけばサンジは青年の横にいて抱きしめていた。

青年はどうすればいいのか迷ってる様子でサンジを見つめていた。

「サンジ。」

「・・・。」

「約束する・・・。絶対にどこにも行かないよ。」

青年はゆっくりと背中の手をまわしてサンジを強く抱きしめた。
もう離れたくないという思いをこめて。

「俺がクリスマスに欲しいのは・・・みんなの幸せ。」

「そうだな。」

「サンジにも幸せを。」

青年はにっこりと笑う。

サンジも一緒になって笑った。

クリスマスの夜に雪が降る。サンタは二人に何を運んでくるのかな？

約束（後書き）

オワタ

温もり（前書き）

クリスマスにサンタがくれたものそれは・・・

【温もり】

温もり

クリスマスって家族と過ごしたり、恋人と過ごすもの。
あるいは信頼できる友達と。

「おい、何してんだ？」

「……。」

別世界へと身を投じていた青年の世界に踏み込む麦藁帽子の少年。
太陽のような笑顔で見張り台に上ってくる。

「お前も下に来いよ。肉食っちまうぞ。」

片手に肉を持ちながら麦わらは言う。

下を見下げれば船員たちがジョッキを片手に宴をしていた。

（こんなに寒いのによくやるぜ。）

青年の心は冷たい。逆に温かな麦わら海賊団。

青年はそこに近づけば溶けてしまいいなくなってしまう。

「下に来いよ。」

「・・・俺はここにいる。」

「くわねえのか？」

麦わらの好意もむなしく青年はただ首を横に振るだけだった。

「そうか。腹減ったらこいよ。」

それだけ残して麦わらは下へと戻って行った。

青年は空を仰ぐ。

闇が広がる空にちりばめられた星達を見て安心したように目をつむる。

（俺だけの世界。誰も入ってくることはない・・・。）

青年は心底落ち着いた様子で深い眠りにつく。

暗闇の中青年は体育座りでそこにうずくまっていた。
星は一切なくただ闇だけが広がる。
どこが終点なのかもよくわからない。

「・・・。」

青年が顔を上げると闇はより一層増していく。
もう目の前は見えない。

けれど青年に恐怖心はなかった。自分がこの闇の一部となることに何の抵抗もない。

もう一度眠りについてしまおうと瞳を閉じた。

「おい、肉くわねえのか？」

「・・・麦わら。」

聞き覚えのある声にそつと青年は視線を上げる。
そこにいたのは太陽のように輝く麦わらだった。
手をこちらに差し伸べて笑いかけていた。

「麦わら。」

「来いよ。」

自分の世界にこだまするその声。

青年はゆっくりと麦わらの手に自分の手を重ねた。
が、その時思いつき足引っ張り張られ重ねられた手は簡単に外されてしまった。

「麦わら！」

離れて行くことが怖い。
闇に行くのはいやだ！

「麦わら！！！」

目が覚めると青年は見張り台で毛布にくるまっていた。
あまりの恐さに自分の肩を抱く。
するとなんだか生暖かい感触が手に触れた。
驚いてそちらに視線を向けると寝息をたてて麦わら帽子が揺れていた。

「む、麦わら……。」

「むにゃ……まだ食えるぞぉ。」

かわいらしい寝言を言うと麦わらは青年のほうへと転がってきた。
寒そうに鳥肌を立てる。

青年はそつと毛布をかけてやると小さく微笑んだ。

「麦わら。俺は冬にふる雪のように冷たい奴だ。そんな奴が麦わらたちみたいに温かいところに入って平気かな？消えてしまったり……しないかな？」

悲しげな瞳を空に向けて青年は尋ねた。

自分の居場所がなくなるのは別にいい。死んでも別にかまわない。けど、何より怖いのは・・・。

「忘れられたくない。」

涙を瞳に滲ませて青年は口をつぐんだ。

「忘れたりなんかしない。」

「！」

返された言葉にビクつく。

麦わらの瞳は開かれていた。

「起きてたの？」

「今起きた。」

気まずい沈黙が流れて青年はどのタイミングでしゃべればいいのか迷う。

とりあえず周りの景色に目を落したりした。

「冷たくなんかねえぞ。」

「え？」

唐突に喋りだした麦わらに青年は驚いた。

あの沈黙で喋りだせるなんて思ってもいなかった。

「お前は絶対に冷たくないぞ！」

麦わらの瞳はまっすぐであまりにも純粹すぎた。

青年は思わず視線をそらした。

「冷たいよ。俺はすごく冷たいよ。」

「冷たくねえってば！ほら！」

麦わらは毛布を剥いで青年の真っ白な細みの手を握った。

しばらく毛布から出ていたからなのか麦わらの手はすごく冷たかった。

「ほら、暖かいだろ！」

「・・・ハハハハハ。」

思わず大声で笑った。

その声にびっくりして麦わらは首をかしげた。

青年は心の底から笑った。

麦わらの純粹さに笑ったのではない。

嬉しくて、嬉しくて笑っていた。

「どうした？」

「いや、なんでもないよ。ありがとう。」

「・・・？お、おう。」

何故お礼を言われたのか不思議そうに思いつつも麦わらは返事を返した。

「ルフィ！肉焼けたぞ！」

下から金髪男の声が響く。

その声に麦わらは反応する。

「肉！！！」

その顔はとても喜んでいて子供みたいだった。
青年はそつとそれをみて微笑んだ。

「おい、行くぞ！」

「え？」

麦わらの言葉の意味が呑み込めずに青年は首をかしげた。
が、そんなのお構いなしに麦わらは青年の腰に手をまわした。
そして、一気に見張り台から降りた。

「うわあああああああ！！！」

「うひよおおおお！」

叫び声を上げる青年とは対照的に喜びの声を上げる麦わら。
下にいた金髪男は平然とした表情で二人を見上げる。

「サンジ！パス！！！」

何かのゲームをしているかのように青年を軽々とサンジへとなげる。
同じように金髪男もゲームのようにそのパスを受ける。

「平気か？」

気を使うように青年の顔を覗き込む。

「あ、ああ。」

「そりゃ、よかった。腹減ってるか？」

「え？」

金髪男は青年を地面に下ろすと優しくそんな笑みでキッチンへと誘導する。

キッチンのドアを開けると温かい光といいにおいが一気に襲いかかってきた。

「あ、やつと降りてきたの？」

「おーやつと来たのかよ。」

「寒くないか？」

「さつさと食べねえとルフィが食っちまうぞ。」

寒いから避難してきたほかの船員が温かく青年に声をかけた。

みんながみんな純粹に笑っていることに気が付く。

青年はそれを見て温かい涙をにじませた。

けど、それはぐっところえて思いっきり笑って見せた。

「すげえー腹減った！」

みんなはそれを見てもっともっと笑う。

「よし！たらふく食べ！」

机に出された料理に青年はよだれをたらす。

けど、その横では同じくよだれを垂らす麦わら。

「麦わら。この料理は俺がもらっ。」

「負けねえ！！」

二人して笑って料理にありつく。

ほかの船員は呆れた様子で笑って二人を見ていた。

温もりある人の手の中に落ちた冷たい雪は消えてはしまったけど下

にある鼻にかかりまた新たな生命を生ませる。
青年はその花の糧となるであろう。

「あ、雪だ。」

「わぁ！本当だ！！」

窓越しから見える雪。

料理から雪へと意識が飛ぶ。

外へと駆け出して雪を見上げる。

掌に雪が落ちるとすぐに溶けてなくなる。

けど、冷たさは手にジーンと残る。

「おめえが仲間である限り絶対に忘れねえよ。」

麦わらが青年の耳元で言う。

けど、すぐに雪二はしゃぐ仲間とともにしゃぎ始める。

「・・・麦わら。俺はあんたを海賊王にするための糧となる。」

それだけひっそりという麦わらとともに雪と戯れ始めた。

聖なるクリスマスに青年ははじめて温かさに触れた。

この暖かさが一生続きますように。

温もり（後書き）

ルフィカッ
コイイW
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7092p/>

クリスマスの奇跡

2010年12月31日04時46分発行